

ガソリンスタンドを エコロジーステーションにする

あぶら とう

油藤商事 株式会社

滋賀県犬上郡豊郷町高野瀬645
店舗数 3 従業員数 14人

ガソリンスタンドの経営が厳しくなっている。かつては全国で6万店近くあった店舗も、現在は3万8000店。産油国の生産制限で原油価格が高騰。円安でそれに拍車がかかる一方、燃費のよいハイブリッド車等の普及により、消費量が減った。さらに消防法改正で、40年以上経過した地下タンクの改修が義務づけられたことから、その費用負担に耐えられず、廃業する店が続出したのである。滋賀県豊郷町でENEOSの看板を掲げる油藤商事は、そんな中で右肩上がりの売上げを記録し続けている。ガソリンスタンドはこのままではいけないと、エコロジーステーション化を目指してきた。その推進役となってきた青山裕史専務に話を聞いた。

■油藤商事の系譜

滋賀県豊郷町は、のどかな田園風景の中にある。近江から陸奥に向かう東山道と、鈴鹿山脈を越えて伊勢・尾張に向かう道が交わる交通の要衝で、伊藤忠や丸紅を起こした伊藤忠兵衛と兄の長兵衛、丸紅の重役で、保存問題で有名になった豊郷小学校を建てた古川鉄次郎らを輩出した、近江商人の町である。

青山裕史さんの曾祖父、藤八氏は、その伊藤忠兵衛らと同時代の人で、菜種油など植物原料のカンテラ油や整髪用の椿油などを、大八車に積んで行商していたという。油売りの藤八、「油藤（あぶらとう）」と呼

ばれ、地域から慕われた温厚で正直な爺さんだったと、この地の郷土史書に見える。その息子の藤一氏が、戦後になって、家庭用石油コンロのための灯油やLPガスの取り扱いをはじめ、やがて「これからは自動車の時代だ」としてガソリンスタンドをは



青山裕史専務取締役

じめた。藤一氏の息子で青山裕史さんの父、金吾現社長は、その事業を引き継いで同業他社を買収し、店舗を増やして、現在の規模にまで大きくした。

藤八翁から数えて4代目の青山裕史さんは、大学卒業後、東京で三菱石油（現JX日鉱日石エネルギー）に3年間勤めた後、父が経営する油藤商事に入社した。1993年のことである。華やかな東京での生活に比べ、田舎のガソリンスタンドの仕事は驚くほど単調だったと振り返る。

「来る日も来る日も車にガソリンを入れ、窓を拭いて、洗車をする。仕事が終わっても遊びに行くところがない。一生こんなふうにして過ごしていくのだとしたら、これはたまらないなと思いました」と青山さんは言う。

■仕事の中にわくわくする楽しさを

それで、町内のNPOや町づくりの活動に顔を出すようになった。この町で祭をやらうと提案し、仲間を募り、行政や年長者グループの支援を得て、祭の実行委員長を引き受けたりした。それはそれで楽しかった。しかし、イベントが終わってしまうと、気持ちが沈む。次はどうするかと考えたとき、NPOや町づくりというのは、維持継続していくには資金が入ってくる仕組みづくりが大切なのだと気がついた。一方、ガソリンスタンドの仕事は、それによってお金は入ってくるものの、単調で、わくわく



豊郷町のサービスステーション

する楽しさが無い。この仕事に、NPOや町づくり活動のわくわくする楽しさを付け加えるにはどうしたらいいのだろうと考えようになったと言う。

当時すでに地球環境の危機が叫ばれ、人々のエコロジー意識は高まっていたが、ガソリンスタンド業界は、そうした風潮にずっと無関心だった。CO₂排出の元凶となるガソリンを毎日車に入れ、洗車のたびに大量の水を使い、新品と交換した古タイヤをお客さんに代わって不法投棄する同業者もないとは言えなかった。こんなやり方を続けるガソリンスタンドはやがて、この世の中で生き残っていけなくなるのではないか。そう思うようになったと言う。

ガソリンスタンドという仕事の中で、何か環境によいことがしたい。そう思って空き缶のリサイクルをはじめた。店頭でアルミ缶とスチール缶の回収ボックスを置き、「空き缶があったらいつでもここに入れてください」とお客さんに呼びかけた。意外なほど好評だった。行政による空き缶回収は、週1回か月2回。その日を待ちきれな

いお客さんが車で空き缶を持ち込むようになり、そのついでにガソリンを入れていく。それが意外な販促効果をもたらした。

■ガソリンスタンドをリサイクルの拠点に

「たとえば、これを見てください」。青山さんは冷蔵庫から1本の缶コーヒーを取り出した。「飲んだ後はリサイクルへ」と印刷されている。だが、缶コーヒーは自販機で24時間、365日いつでも買えるのに、リサイクルのための空き缶回収は、週1回か月2回しかチャンスが巡ってこない。飲料メーカーの工場から全国津々浦々まで商品を届けるための物流は、この国ではものすごくすすんでいるが、いったん散らばったものを一箇所に集約する物流は、ずいぶんと遅れている。その仕組みを確立しないと、リサイクルはすすまない。

「その役割をガソリンスタンドが担えるのではないかと、気がついたのです」と青山さんは言う。ガソリンスタンドは全国に何万もの店舗がある。そこには、たとえセルフサービスの店であったとしても、消防法の規程によって必ずスタッフがいる。空き缶をアルミとスチールに分別してボックスに入れる人は、そのスタッフの目を意識するから、無人のステーションのように乱雑になる心配はない。回収した空き缶は回収業者の拠点まで届けるのだが、ガソリンの配達の手ついでに届ければよく、そのコストは、ガソリンの販促効果で十分にカバー

できる。だから、ガソリンスタンドこそ、エコステーションとして最適なのだと青山さんは言う。

こうして、回収対象は、空き缶からビン、ペットボトル、新聞紙、段ボール、牛乳パックなどへと広がった。

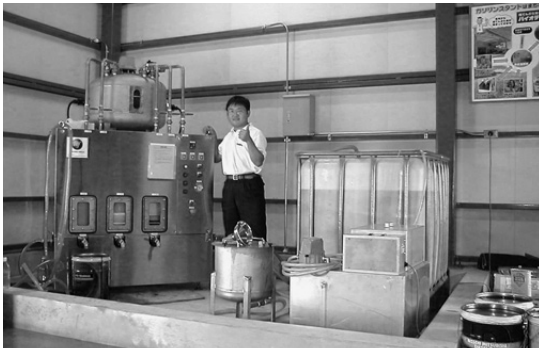
■バイオディーゼル燃料の研究

「天婦羅油の廃油で車が走るそうだね。本当にそんなことできるの？」

資源回収をはじめてしばらくしてから、青山さんはある人からそんな話を聞いた。大きな衝撃を受け、その廃食油処理業者を必死になって探し出し、東京墨田区まで訪ねた。そこでは、廃食油からバイオディーゼル燃料をつくり出す精製装置が完成しており、それによってディーゼル車が勢いよくエンジンを回転させていた。

廃食油で車が動くのなら、資源の有効利用になるし、大気中のCO₂を増やさずに済む。環境に負荷をかけるばかりだったガソリンスタンドは、はっきりと環境を守る側に立てる。

以来、バイオディーゼル燃料の研究に没頭した。ディーゼルエンジンの仕組みも改めて学び直した。わかってきたのは、ディーゼルエンジンというのはファジーにできている、軽油にも、重油にも、灯油にも、そして天婦羅油の廃油を精製したバイオディーゼル燃料にも十分に対応できるということだった。軽油と混合させる場合は、バ



廃食油の精製装置



回収された廃食油

バイオディーゼル燃料の混合比率は5%以下と定められている。バイオディーゼル燃料100%でも車は十分に動くのだが、この場合には石油メーカーの品質保証はない。精製した油藤商事が100%品質保証することになる。そのあたりを徹底的に調べた末、廃食油をバイオディーゼル燃料に精製する装置の導入計画を金吾社長に進言した。

「大丈夫か？ もう少し様子を見たほうがええのやないか」。金吾社長はそう言ったが、「いや、植物性の油に戻ることは藤八爺さんの時代に戻ることなのだから、絶対に間違いはない」という青山さんの説得に、金吾社長は大きくうなずいてゴーサインを出した。

■廃食油リサイクルシステムの確立

現在、油藤商事が回収に回っている廃食油回収ステーションは、滋賀県内に150カ所。年間270キロリットルを回収している。油藤商事がバイオディーゼル燃料をつくらせて販売しているという話は、これまでもテレビ・新聞・雑誌などで繰り返し紹介さ

れてきた。それを見て、バイオディーゼル燃料を使いたいという問い合わせが続々と入ってきた。それに対して青山さんはこう言ってきた。「ねらいは資源のリサイクルで、環境への負荷を減らすことです。だから、廃食油の回収にぜひ協力してください。たとえわずかでも廃食油を回収していただけたところに、バイオディーゼル燃料をお売りしたいのです」

こうして1軒1軒に頼んで回り、レストラン、食堂、農協、公民館、スーパーの店頭などに廃食油回収ステーションが設置され、地域の人々がそこに天婦羅油の廃油を持ち寄るようになった。滋賀県内のパナソニック、平和堂、ヤマト運輸、近江鉄道、彦根市役所、滋賀大学などの企業や公共機関の従業員食堂から出た廃食油と、従業員が持ち寄った廃食油もそれぞれの事業所内で集められ、油藤商事のスタッフが定期的にそれを回収し、バイオディーゼル燃料に変え、それぞれの物流トラックや送迎バス、ゴミ収集のパッカー車などの燃料として活用されている。



バイオディーゼル燃料の給油

軽油1リットルの価格は、この記事の取材当時130円。軽油にバイオディーゼル燃料を5%混ぜた混合油（これを「B5」と呼ぶ）も同じ130円である。バイオディーゼル燃料100%の「B100」は、当初から116円と設定している。この価格差からも「B100」を求めるお客さんが多いのだが、実際には精製能力のほうを追いつかず、やむを得ず「B5」を使ってもらっている。設備を増やして精製能力を高めればもっと売上げが上がるのだが、そうすると廃食油の供給能力のほうを追いつかなくなる。

みんな地球を汚したくない、資源として活用できるものはできる限りリサイクルに回したい、と思っている。だから、いったんリサイクルの流れができると、その流れは止まることがない。青山さんは、その流れの道筋をつくることに成功した。

その道筋は滋賀県内のローカルなものにとどまっているが、それ以上に広げることは、いまの油藤商事の能力の範囲を超える。そこで、自社のガソリンスタンドを同じようにエコステーションに替えたいという同業他社には、すべてをオープンにして

情報提供していこうと決めた。求められれば出かけていって講演を引き受けているし、豊郷町のガソリンスタンドには、北海道から沖縄まで全国各地のガソリンスタンド経営者が、しばしば見学に訪れている。

■引きこもりの子供たちを育てる

「これから計画していることは？」と聞いたとき、「エコロジーの話から離れてしまうのですが…」と断って、青山さんは、自分の中でずっと温めているもうひとつの思いを打ち明けてくれた。「実はうちでは、不登校で社会への適応が難しい子供を1人預かっているのです」

ガソリンスタンドというのは、どちらかといえば3Kの職場である。朝は早いし、夏は暑く、冬は寒い。その中で油にまみれながらの作業が続く。お客さんから「レギュラー満タン」と言われれば「ハイ！」と答えて、窓を拭いて、ガソリンを入れ、代金を受け取って、お釣りを渡し、「ありがとうございました」と頭を下げる…。簡単といえば簡単な仕事だが、工場内の作業と違って、最小限の接客応対が要求される。それが不登校で引きこもってしまった子供たちに、それまで身につかなかった社会性を身につけさせ、社会で生きていく自信を植え付ける。

いまの子は4人目で、1人目は、ある中学校の先生から「ウチの卒業生で、2日間高校へ行ったきり、その後行けなくなった

子供がいる。面倒を見てやってくれないか」と言われて引き受けたのが最初だった。それから2年半、その子は1日も休まず出勤してきた。「お前、ウチの社員になれ」と言うと「いや、ちゃんと高校を出て、大学へ行きたい」と言う。「そうか、それやったら行け。応援したるわ」と送り出した。2人目も3人目も同じように巣立っていき、そしていまが4人目。

そうした子供たちを見守りながらいっしょに仕事をしていることは、他の従業員の気持ちを間違いなく優しくし、間違いなく勤労意欲を高めている。今後は、こうした子供たちをきちんと社会に送り出していく



バイオディーゼル燃料で運行されているバス

仕組みづくりに力を注ぎたいという。

ガソリンスタンド経営を通じて、油藤商事の4代目は、いまの時代を最大限、精いっぱい生きておられる。その底流に、近江商人を輩出したこの土地の風土と、藤八翁以来の時間の流れの意識が息づいているのを感じた。

取材・執筆 山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動を取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「絵で見る創意くふう事典」をネット公開中